

**巻頭言** 患者との共生社会と生物学的精神医学研究

住吉 太幹

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

日本生物学的精神医学会（本学会）の目的として、「精神疾患の原因を解明し診断法・治療法開発につなげるという、共通の目的を持った研究者が結集する貴重な場となる」ことが本学会のホームページに掲げられている。このフレーズ前半の「精神疾患の原因解明」は、筆者が35年前に本学会会員となる以前から唱えられており、精神疾患の手ごわさを未だ語り継いでいるといえる。逆説的であるが、なお多くの精神疾患の原因が“未解明”なため、同フレーズの前半部分は（少なくとも一部の若手研究者の方々には）未だ新鮮な響きを保っており、「精神疾患の原因解明」に対するリソースが、絶えず割り当てられてきた。

一方、後半の「治療法開発」についても（筆者が本学会会員となった研修医時代から今に至るまでの時代を含め）、世界中の多くの研究者、臨床家のエフォートが積み込まれてきた。特に、治療法自体が生物学的である新規の薬物療法や脳刺激療法に加え、心理社会的な介入に脳形態・機能の変化などが随伴することも、生物学的精神医学研究の守備範囲となった。言うまでもなく、これらの治療研究が求められる理由の一つに、陰性症状（統合失調症の場合）、治療抵抗例、認知機能障害などのアンメットニーズの存在が挙げられる。疾患を問わず、いずれも患者の社会復帰を著しく妨げるため、精神疾患の原因が“未解明”の状況下であっても、技術革新や集学的な取組みが行われてきた。そして、それらのアンメットニーズ克服をめざす治療研究・開発は、日進月歩の成果を挙げている。

精神疾患患者の社会包摂や福祉支援に関連し、筆者は最近、国際学会などで交流をもつ専門家らと共に、世界各国に向けた統合失調症に関する政策提言書の作成にかかわった<sup>1)</sup>。同書には、数学者のジョン・ナッシュや作家のゼルダ・フィッツジェラルドなど、自らの病と苦闘した当事者が、芸術、音楽、数学、科学などの分野で目覚ましい社会貢献をしてきたことが触れられている。多大な困難を伴う患者

の人生を支え、時に並外れた才能を彼らが発揮できる環境は、家族をはじめとする介護者、および精神科医、専門看護師をはじめとする専門家によるケアにより提供される。そのようなケアパスのイノベーションとして、ウェアラブルデバイスを用いた睡眠パターンや自律神経活動のリアルタイムモニタリングについても上記の政策提言書に記述されており、一般社会に認知されつつある生物学的精神医学研究分野の一例である。

治療研究・開発には、各患者に特異なニーズを掘り下げ、社会的リカバリーを優先するという展開も、さらに求められよう。そのようなニーズを表す統合失調症患者の言葉として、専門誌に掲載されている以下の記述を例に挙げる。

「僕の望みは、（中略）人生で何か喜ばしいことがあればいいなと思っています。（中略）それから、友達をつくって仲間と何かできる場所が社会にあれば、孤立感を抱かずにすむのだけれど。実際には今、この2つともできているけれど、それを取り上げられたくないんです。あまり眠くならない、ドーパミンを減らさなくていい薬ができてくれるといいなとも思います。」<sup>2)</sup>

このような「患者の語り」を意識し、患者自身にとって価値ある充実した生活の達成を主な目標とする治療法の創出が、患者との共生社会の涵養につながると期待する。

## 文 献

- 1) Galderisi S, Kaul D, Kéri P, et al (2024) Schizophrenia - Time to Commit to Policy Change 2024 (邦訳版:「統合失調症—今こそ政策の変革に注力を: 2024年改訂版提言書」) Oxford Health Policy Forum.
- 2) Tian R (2022) My hallucinations : feeling whatever appeared in my mind as being true. Schizophr Bull Open, 3 (1) : sgab059.